

特集

病理診断とは？

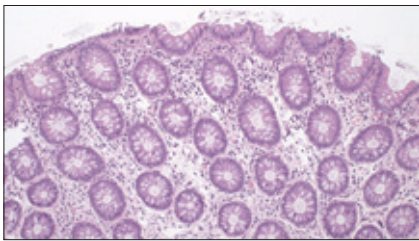


記：病理診断科 医師
佐藤 由美子

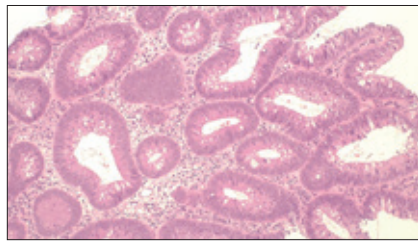
日本病理学会認定病理専門医



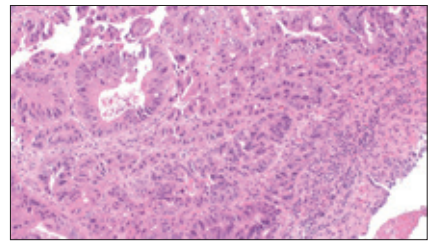
突然ですが、クイズです。下の3枚の写真をご覧ください。これらはヒトの大腸の細胞を染色し100倍に拡大して観察したものです。この中に①正常、②癌、③良性腫瘍がありますが、どれに当てはまるかわかりになりますか？



【写真ア】



【写真イ】



【写真ウ】



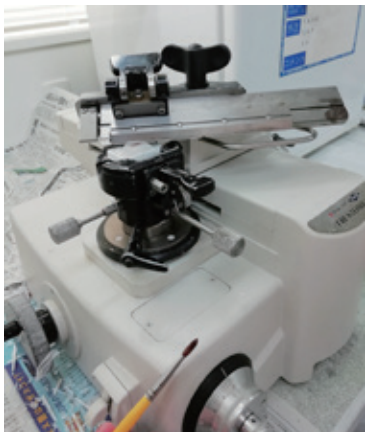
(クイズの回答は次ページへ)

病理診断科

私達病理診断科は、患者さんから採取した細胞や組織(=細胞が集まっているもの)の材料で、上のような細胞や組織像を観察し、その病変がどのような種類のものかを診断する科です。

例をあげてみます。ある患者さんが腹痛で病院を受診したとします。担当医が胃の病気を疑って胃カメラを行い、胃の中に病変を見つけました。カメラの映像だけでは病変の種類が確定できない時は、病変から爪の先くらいの小さな組織を採取します。この材料が病理診断科に送られてきます。

病理診断科では担当の臨床検査技師が1、2日かけて材料を化学的に処理し、おおよそ5マイクロメートル(5/1000ミリメートル)ほどに薄切りをします。これを染色しガラスに乗せて標本とします。染色には様々な方法がありますが、近年は特定の構造物を染め分ける「免疫染色」を加えた検索が、診断や治療方針決定に不可欠になっています。



【薄切マイクロトーム】



【染色装置】



【自動免疫染色装置】

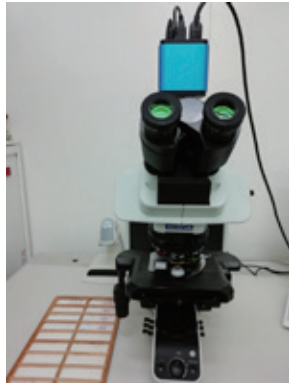


病理医

病理医はこのガラス標本を顕微鏡で観察し、病変の種類、炎症の種類、腫瘍かどうか、良性か悪性かなどを判断しています。



【ガラス標本】



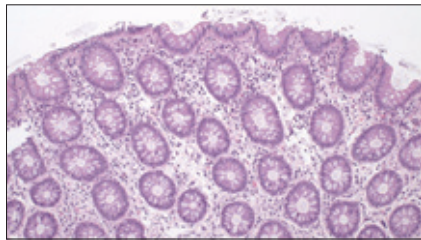
【顕微鏡】

病理医が作成した診断報告書をもとに担当医は患者さんの治療方針（経過観察でよいのか、投薬で治療か手術が必要かなど）を決定するのです。

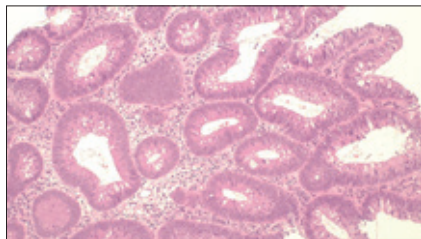


冒頭の写真クイズの答えは以下の通りです。

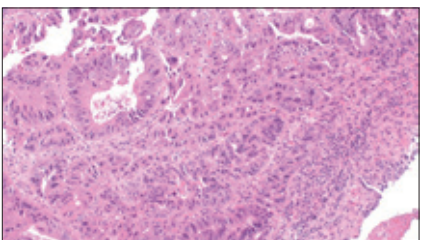
写真ア
正常



写真イ
良性腫瘍



写真ウ
癌



それぞれの写真の細胞の顔つきが異なることに気がついていただけましたか？



病理診断

現在は血液検査や画像診断の発展も著しく、病気の診断のために体から細胞を採取する検査をしなくてもよい病気もたくさんありますが、特に腫瘍性の病気では、病理医による病理診断は治療方針決定になくてはならない検査になっています。

また病理診断科では、不幸にして病院でお亡くなりになった患者さんの死因、病態解析、治療効果などを検証し、今後の医療に活かすことを目的に行われる病理解剖も担当しています。

近年、人気ドラマ「フラジャイル」など、病理医が主人公の魅力的な作品も登場し、少しずつ社会の認知度も上がっている病理診断科ですが、病理医は日本全体では全医師数の0.6%ほどしかいないと言われており、2020年11月時点で山口県内で登録されている病理専門医は20名のみです。病理医の育成も今後の課題となっています。

おわりに

私達病理医や病理検査技師は患者さんと直接お会いする機会はほとんどありませんが、患者さんが根拠のある診断に基づいた良質な治療が受けられるよう、日々業務に邁進しています。

